

# 日本語コミュニケーションからみた不寛容の問題と和解への道、そして新たな発展へ

齋藤孝滋

## I [国内]日本語標準語に対する方言：

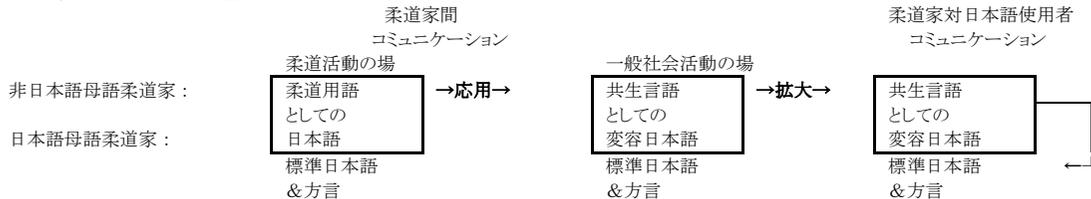
1. 「生活言語」vs.「アクセサリー」(小林隆 2004)
  - ・生活言語としての方言使用者における、「アクセサリー」としての方言使用(者)に対する寛容と不寛容の問題。
  - ・「アクセサリー」としての方言使用者における、「生活言語」としての方言使用(者)に対する意識。
2. 「自己表現の手段としての方言」(陣内正敬 2007)
  - ・自己表現の手段としての方言使用(者)に対する寛容と不寛容の問題。

## II [海外]日系人社会における日本語と移住先言語

1. 南米日系人社会の日本語
  - 伯他「葡・西語&日本語の混成言語」使用 vs パラグアイ「日本語と西語とのバイリンガル」(中東靖恵 2010)
2. クレオール日本語
  - 「(アタヤル人の母語である)台湾・宜蘭クレオール(簡月真・真田信治 2010)」vs.「標準日本語」
  - 例：wasi sensey cigow, washi ga seto.  
(私は先生じゃない。私は学生だ。)

## III 国際的共生日本語の成立と発展：

1. 「柔道用語による共生日本語」vs.「標準日本語」(齋藤孝滋 2007)



2. 「柔道礼法による共生礼法」 vs. 「標準日本礼法」

1.「柔道用語による共生日本語」vs.「標準日本語」と類似した変容が認められる点で興味深い。

### [解説]

- ・柔道用語としての日本語は、行動に関する基本的表現、評価・ペナルティに関する基本的表現体系を持つ。→変容日本語は、行動と評価に関する基本的表現体系を持つために、一般社会活動の場でも有効なコミュニケーション言語となり得る。
- ・柔道・JUDO=正式名称「日本講道館柔道」。「講道館」は嘉納治五郎により設立。競技人口はサッカーについて世界第位、IJF(国際柔道連盟)加盟国数は国連を上回る国際的メジャースポーツ。使用言語はすべて日本語(社会方言的言語体系を持つ言語) → 柔道用語による日本語は、スポーツとともに世界的に普及した、最も使用者数が多い「変容日本語」である。→ 「国際的共生言語としての条件を備えている」
- 嘉納治五郎(東京高等師範学校校長、日本で最初の留学生教育機関「宏文学院」設立者、アジアで最初のオリンピック委員。トレバー・レグット<『武士道と紳士道』著者、BBC 日本語部長>が、世界で最も著名な日本人として紹介)。柔道精神=「精力善用」(エネルギーを「善く」かつ「効率よく」活用すべし) → 柔道だけでなく、社会活動、環境問題にまで及ぼす思想。エコ思想の魁。<実際に環境保全については東京五輪(第2次大戦により中止)で計画>
- 「自他共栄」とその実践 → 「多文化共生教育の魁」(齋藤 2004)
- ・共生日本語については、岡崎暉(2007)21 頁に、その性格について述べられている。

### [文献]

岡崎暉監修、野々口ちとせ他編 2007『共生日本語教育学 ―多言語多文化共生社会のために』雄松堂書店

- 簡月真、真田信治 2010「方言形「ん」と標準語形「ない」の変容 ―台湾・宜蘭クレオールの否定表現―」『日本方言研究会 第90回 研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
- 小林隆 2004「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1
- 中東靖恵 2010 「パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容―パラグアイの広島県移民とその家族を対象に―」『日本方言研究会 第90回 研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会
- 齋藤孝滋 2004「多文化共生日本文化教育者としての嘉納治五郎」『フェリス女学院大学日本語教育学論究』創刊号
- 同 2007「柔道の試合における礼行動の変容に関する事例的研究」フェリス女学院大学日本語教育学論究3
- 同 2008a「共生言語としての重要用語をもととした変容日本語の特徴」齋藤孝滋編『日本語・日本文化の発信・受容・変容に関する基礎的研究』DTP 出版
- 同 2008b「IJF ルールにおける礼法・挨拶行動の事例的研究」齋藤孝滋編『日本語・日本文化の発信・受容・変容に関する基礎的研究』DTP 出版
- 陣内正敬 2007 「若者世代の方言使用」『シリーズ方言学 3 方言の機能』岩波書店
- トレバー・レグット 1993『日本武道のこころ』サイマル出版会
- 村田直樹 2001『嘉納治五郎師範に学ぶ』日本武道館
- 野口宏水 2007 「世界マスターズ柔道選手権大会 ブラジル・サンパウロ」『柔道』9月号

**[付記]** 本シンポジウム開催後の日本学術会議公開講演会「日本語の将来(2010年9月9日開催、於日本学術会議講堂)における御講演：木部暢子氏「方言の多様性から見る日本語の将来」の中に、本シンポジウムとも関連する興味深い指摘がみられたことを付記しておきたい。